

令和 3 年 5 月 23 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00941

研究課題名(和文) 宮内庁所蔵『王公族実録資料』の機密文書に関する研究：閔妃暗殺事件後の大韓帝国皇室

研究課題名(英文) Studies for historical materials of "Oukouzokujitsurokusiryō" which are in the possession of Imperial Household Agency

研究代表者

新城 道彦 (SHINJOH, Michihiko)

フェリス女学院大学・国際交流学部・准教授

研究者番号：40553558

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：宮内省(現宮内庁)が『王公族実録』を編修するために収集した膨大な史料群である『王公族実録資料』を解釈・データ化するとともに、その史料を用いて韓国併合直前の大韓帝国皇室の動向、具体的には閔妃暗殺事件以降の大韓帝国皇室における権力闘争、およびそれに日本がどのようにかかわっていたのかを考察した。特に「乙未亡命者関係書類」は禹範善を暗殺した高永根が、閔妃を継いで高宗の王妃となった敵妃と過去に浅からぬ関係にあったことを詳細に記録しており、「高永根」や「敵妃」の評価を大きく変えるものとなった。本研究の成果は「高永根による禹範善暗殺の裏面 淳妃嚴氏の密通と陞后問題」というテーマで論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本は1910年に大韓帝国を併合し、大韓帝国皇室の直系にあたる太皇帝の高宗、皇帝の純宗、皇太子の英親王李垠を王族として、また傍系を公族として帝国内に編入した(両身分を合わせて王公族といった)。この王公族の誕生は明治末年から大正にかけて本格化する宮内省の実録編修作業と期を同じくし、日本は『王公族実録』を編集した。そのために収集した膨大な史料群は多種多様で未刊行のものもあり、準皇族たる王公族の行跡にかかわる史料はもちろん、大韓帝国の内実や日本と関係する文書も多数含まれている。本研究の意義は、新史料によって韓国併合を前後する日韓関係史に新たな視点を提示し、研究を進展させられる点にある。

研究成果の概要(英文)：I deciphered "Oukouzokujitsurokusiryō 王公族実録資料" which are composed of many documents of historical materials collected by the Ministry of the Imperial Household to edit the "Oukouzokujitsuroku 王公族実録", and convert these documents into data. "Oukouzokujitsurokusiryō" includes the "Itubiboumeisyakankeisyōrui 乙未亡命者関係書類", too. I considered how Japan was involved in the power struggle in the Korean imperial family after the Eulmi Incident(乙未事変 Assassination of Queen Min) with it. "Itubiboumeisyakankeisyōrui" records that Ko Yeong-geun had a child with queen consort Eom who is Gojong's wife. I published the results of my research work under the theme of "Background of the case where Ko Yeong-geun assassinated Woo Beom-seon".

研究分野：東アジア近代史

キーワード：王公族実録

1. 研究開始当初の背景

中国では、皇帝の没後に君主の言行を中心とした一代記を「実録」の名で編修する伝統があった。この伝統はやがて朝鮮半島や日本にも波及する。特に朝鮮王朝はその伝統を忠実に守って1967巻にも及び『朝鮮王朝実録』(ユネスコ記憶遺産に登録)を編修している。

日本では「実録」編修の伝統は古代で留まり、根付かなかった。しかし、明治の王政復古によって天皇中心の国家体制に移行すると、宮内省で実録編修作業を開始し、先帝の事績を『孝明天皇紀』としてまとめて明治天皇に奉呈した。さらに、韓国併合によって準皇族たる王公族を創設すると、李太王(高宗)の薨去をきっかけに『王公族実録』の編修にも着手した。

『王公族実録』は長らくその実在が疑われていたが、最近になって宮内公文書館に所蔵されていることがわかった。しかも『王公族実録』を編修するために収集した膨大な未刊行史料群『王公族実録資料』も一緒に保管されており、その中には大韓帝国皇室にかかわる貴重な文書が含まれていることも明らかとなった。特に、閔妃暗殺にかかわった禹範善を日本で暗殺したことで知られる高永根の関連資料が散見され、その解読によって当時の日韓関係に新たな視点を提示できる可能性がある。

2. 研究の目的

宮内省は『王公族実録』を編修するために朝鮮や日本で史料を収集した。朝鮮王朝時代から大韓帝国時代の記録物(『日省録』『承政院日記』『朝鮮王朝儀軌』など)はもちろん、宸翰、譜牒、王家の系図、さらには日本の外交文書、『警衛日誌』などの警備記録までその対象は多種多様であった。そうした史料を簿冊にまとめて保管したものが『王公族実録資料』である。

そこで、『王公族実録資料』所収の史料を整理・データ化し、これまで誰も着目してこなかった大韓帝国皇室の動向を、新たな文書を用いて研究する点に本研究の目的がある。そもそも『王公族実録』は日本近代史、朝鮮近代史を考察するうえで第一級の歴史書であるにもかかわらず、いまだほとんど研究されていない。その史料に着目して韓国併合直前の大韓帝国皇室の動向、具体的には閔妃暗殺事件以降の大韓帝国皇室における権力闘争、およびそれに日本がどのようにかかわっていたのかを考察する点において、本研究は独自性があるといえる。

3. 研究の方法

『王公族実録資料』はあくまで『李太王実録』『李熹公実録』『李焞公実録』の編修を前提にして各人の言行に関連するように簿冊されており、特定の事件ごとに史料がまとめられているわけではないので、そのままでは使用しづらい。そこで、これら未刊行の貴重史料を各研究者が使用しやすいように書誌情報を「資料番号」「資料名」「件名」「作成年月日」「執筆者」「宛先」の項目に分けてデータ化し、検索しやすいようにした。

4. 研究成果

(1) 研究期間に『李太王実録資料』第14巻のデータ化を終え全体を見直して修正を進めた。以下、各巻に収録されている資料名を提示する。

第1巻:「李王家先系」「列聖継序之図」「李太王行状」「八城卜居誌」「東文選巻之一百十九」「高麗史」「龍飛御天歌」「列聖誌状通紀」「増補文献備考」「慵齋叢話」「璿源系譜紀略」「李太王墳誌」「王公履歷書」「王公旅牒籍」「徳寿宮内入調」「日省録」「大東紀年」「韓国官報号外」「皇貴妃嚴氏譜略」「乙未亡命者関係記録」「乙未亡命者関係書類」「王族及公族二関スル書類」

第2巻:「太祖大王実録」「国朝実鑑」「王公履歷書」「李太王行状」「李太王日省録」「法規類編」「増補文献備考巻四十五帝系考」「韓国官報号外」「癸亥日史」「大王大妃殿綸綍」「統監府記録海牙密使事件」

第3巻:「亡国秘密なみだか血か」「韓国官報号外」「李太王日省録」「尊崇儀軌」「嘉礼都監儀軌」「上号都監儀軌」「王世子冊礼都監儀軌」「大王大妃殿加上尊号都監儀軌」「英祖大王廟号都監儀軌」「加上尊号都監儀軌」「翼宗大王上号都監儀軌」「義王英王冊封儀軌」「淳妃冊封儀軌」「進封皇貴妃儀軌」「進封皇貴妃儀軌」

第4巻:「内進饌儀軌」「寶印所儀軌」「日記廳改修膳録」「璿源譜略修正儀軌」「影幀模写都監儀軌」「哲宗大王国葬都監儀軌」「祈廟都監儀軌」「元子阿只氏藏胎儀軌」「哲仁王后国葬都監儀軌」「神貞王后国葬都監儀軌」「明成皇后国葬都監儀軌」

第5巻:「韓国施政年報」「李太王行状」「李熹公従官録」「重建都監費決算書」「永禧殿營建都監儀軌」「真殿重建都監儀軌」「肇慶壇等營建廳儀軌」「慶運宮重建都監儀軌」「中和殿寧寧殿新建明細書」「景福宮營建日記」

第6巻:「景福宮營建日記」

第7巻:「通文館志」「同文考略節使」「大清皇帝功德碑」「日省録」「鍾閣前碑石拓本」「皇明実録」

第8巻:「頭要職務補任録」「蒼海遺稿興何如璋書」「第日本国大清国修好条規」「同文考略続

(交隣)公使」「李熹公從官録」「通商ノ宿弊芟除ノ件ニ関スル往來」「韓米修好通商条約(壬午四月)」「通文館志」「濟物浦条約(壬午8月)」「韓英修好通商条約(癸未十月)」「独修好通商条約(癸未十月)」「韓伊修好通商条約(甲申閏五月)」「明治外交要録」「天津条約(乙酉四月)」「韓仏修好条約(丙戌五月)」「韓墾修好通商条約(壬辰五月)」「日清講和条約(乙未四月)」「朝清通商条約(己亥九月)」「韓白修好通商条約(辛丑三月)」「韓丁修好通商条約(壬寅七月)」「日韓議定書(甲辰2月)」「韓国条約類纂」「日露海戦記(後紀)」「日韓協約(乙巳十一月)」「官報」

第9巻:「李太王日省録」

第10巻:「李太王日省録」「本朝紀事」

第11巻:「李太王日省録」「本朝紀事」

第12巻:「李太王日省録」「乙未亡命者關係書類」

第13巻:「乙未亡命者關係書類」「兪吉濟口供ノ要領」

第14巻:「乙未亡命者關係記録」「陛見公文光武十年」「贈進公文光武十年」

なお、宮内省図書寮の図書頭をつとめた森林太郎(鷗外)は浅見倫太郎を図書寮囑託員として取り立てて1919年6月2日に『王公族実録』の編修を命じたが、その浅見は実録編修の報告書のなかで、「真実」を記載するために公文書・私文書にかかわらず広く史料を集め、「不偏不倚」の精神で作業にあたらなければならないとの考えを示している(『実録編修録 自大正五年至大正十年』)。今回の史料整理によって『王公族実録資料』には多種多様な史料が収録されていることがわかり、浅見の言葉を裏付けるものとなった。

(2)『王公族実録資料』のなかでも特に目を引いた史料は「乙未亡命者關係書類」である。この史料によく登場するのは、閔妃暗殺事件にかかわった禹範善を日本で殺害した高永根と、高宗の側室で閔妃亡きあと「皇子」李垠を生んで継妃となった廢妃である。

高永根は最初から禹範善を殺害するために日本に渡ったわけではなかった。彼自身も19世紀末に大韓帝国で反体制運動をしたことで高宗の恨みを買って、日本に亡命していたのである。その後、日本での窮乏生活に耐えきれなくなって、1902年7月に危険を承知で大韓帝国に戻ろうとするのだが、それを知った廢妃は駐韓日本公使の林権助に依頼して彼の帰国を妨害した。その理由を林公使が小村寿太郎外相に報告した以下の電報が、「乙未亡命者關係書類」として収録されている。

妃〔廢妃〕ガ一時民間ニアリシ際、高〔永根〕ノ許ニ養ハレ私生児サヘ其間ニ設ケラレシ事実アリトノ事ニテ、過般妃ノ陞后問題ニ関シ此間ノ消息或ハ伝播スルコトモアラン乎トノ懸念アリタル事モ有之候ヘハ、此際右ノ高〔永根〕ノ就縛セラル、事モアリテ秘密ノ幾分ニテモ暴露センニハ妃ノ目下進メツ、アル陞后問題ニ莫大ノ影響ヲ来スヘキハ勿論、場合ニ依リテハ妃ハ為メニ立脚地ヲ失ヒ或ハ死地ニ陥ルヤモ測ラレス、故ニ妃ニ取リテハ高〔永根〕ノ渡韓就縛ハ恰モ死活ノ問題ニ属スルノ觀アリテ、妃力此事ヲ知ルヤ否〔や〕直チニ其腹心ノモノヲ派シテ本使ニ高〔永根〕ノ送還ヲ哀請シ、若シ聴カレズンハ死地ニ附クノ外ナシトノ旨ニテ懇々依頼セラレ本使ニ於テモ当時ノ右關係ヲ承知致居候ヘハ〔…〕

すなわち、廢妃が過去に宮中を出て「民間ニアリシ際」に高永根のもとで養われ、「私生児」をもつたという衝撃の事実を告げているのである。林公使が「本使ニ於テモ当時ノ右關係ヲ承知致居候」としているのが、確度の高い情報であったことがわかる。

もと内人だった廢妃は側室候補者である承恩尚宮に昇格したときに閔妃の嫉妬で宮中から追放されたことがあった。「民間ニアリシ際」とはこのときを指しているのであろう。朝鮮王朝において宮女は処女として入宮し、王に見初められて側室になるという方に一つのチャンスをつかむ以外は一生を独身で過ごさなければならなかった。それにもかかわらず、廢妃は高宗の側室になる前に高永根と関係を持ち、子まで産んでいたのである。ちなみに、閔妃の信任を得て立身出世した高永根が、閔妃の死後においても廢妃の庇護を受けて宮中で重用され続けた理由はここにあったと考えられる。

廢妃は閔妃が亡くなると再び宮中に戻り、李垠を産んで、瞬間に貴人、嬪、王妃へと昇格した。その頃にはすでに朝鮮は清から独立して皇帝を戴く大韓帝国となっており、廢妃は初代皇后の地位を手にする立場にあったのである。しかし、このとき廢妃に反感を持つ勢力が皆無だったわけではない。たとえば、高宗の甥にあたる李垠は廢妃が王妃になることでさえ反対しており、「廢尚宮ノ如キ者ハ其身微賤ヨリ出テ、國王ノ寵遇ヲ得タルヲ奇貨トシ、奸臣輩力地位ヲ得ントスルカ為メ王妃ニ冊立セント企ツルモノ」と批判し、父の李載冕に対して「王室ニ關係アル者ハ宜シク之ニ反対ス可シ」と忠告していた。また、廢妃が皇后になることに関しては閔氏一族からの反発も強かった。

そのような状況で、韓国皇室に背を向けて日本に亡命していた高永根が逮捕され、取り調べの過程で醜聞が露頭すれば、廢妃は陞后どころか「死地ニ陥ル」危険性さえあったのである。それゆえ、失脚を恐れた廢妃は直ちに腹心の者を林公使のもとに派遣し、高永根を上陸させずに再び日本へ送還するよう哀請したのであった。

これに対する林公使の対応も「乙未亡命者關係書類」収録の電報から知ることができる。林公使は小村外相に次のように報告している。

此際妃〔熾妃〕ノ哀請ヲ容レ救護致置候ハ、今後ノ萬事ニ付利益トモ認メラレ、尚ホ高〔永根〕ヲ捕ヘタル場合ニ於テハ意外ナル紛擾ヲ政府若クハ宮中ニ惹キ起スヘキハ予期ニ難カラス、而シテ紛擾ノ結果トシテ我ニ利益アルヘキ予想ハ寧ロ覺東ナキ坎トモ認メラレ、旁同人ノ上陸ハ事態ノ困難ヲ招クヘクト相考候ニ付〔…〕

すなわち、熾妃に恩を売っておけば「今後ノ萬事ニ付利益」と考え、また、高永根が捕縛された場合、韓国政府や宮中に「意外ナル紛擾」を引き起こしかねず、結果的にそれが日本に利益をもたらすことにはならないと判断し、熾妃の哀請を受け入れることにしたのである。

林公使は仁川にたどり着いた高永根のもとに仁川領事を派遣し、「上陸ハ極メテ危険ナリ」と伝え、帰国を断念するよう説得した。高永根がこれに同意すると、林公使は彼を他人に接しないようしばらく船内に留め置き、7月19日に日本に送還した。

高永根と過去に「不浅関係」にあった熾妃は、宮中における立場を守り続け、1903年12月25日には皇后に次ぐ皇貴妃の地位を手に入れた。しかし、結局皇后にはなれぬまま韓国併合となり、1911年7月に腸チフスで急逝した。熾妃が高宗との間にもうけた李垠は、1907年に李垸が第2代皇帝（純宗）に即位したときに皇太子となり、直後に伊藤博文統監の提案で東京に留学している。今ではこの留学は「人質」と論じられること多く、この部分だけを切り取って、熾妃は植民地化の過程で息子を奪われた憐れな母とか、政治的に弱い立場の女性としてのみ言及される傾向にある（たとえば、本田節子『朝鮮王朝最後の皇太子妃』、チョンボムジュン『帝国の後裔たち』、本馬恭子『徳恵姫』など）。

しかし、「乙未亡命者関係書類」の史料にもとづいて歴史を見直すと熾妃はけっしてそのような女性ではなく、陸后のためには手段を選ばなかったことがわかる。熾妃は政治的野心を実現するために日本の力を借りて高永根の帰国を妨害した。高永根がそのまま大韓帝国に上陸していれば、捕縛のうえ処刑されたのは間違いない。そうであれば、翌年に禹範善が高永根に殺害されることもなかったのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 新城道彦	4. 巻 722(264)
2. 論文標題 歴史に埋もれた朝鮮王公族の家譜	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と地理 日本史の研究	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新城道彦	4. 巻 23
2. 論文標題 高永根による禹範善暗殺の裏面 淳妃嚴氏の密通と陸后問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際交流研究	6. 最初と最後の頁 29-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 新城道彦、浅羽祐樹、金香男、春木育美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 298
3. 書名 知りたくなる韓国	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------